學界展望

米國の哲學と哲學教育*

フレデリック　P.　ハリス

一

近年、ジョン　デュイの逝去にともなつて、アメリカ哲學最初の大繁榮時代が終りを告げたと言われてもいい。なるほど、アメリカ哲學には清教主義やジョナサン　エドワーズや啓蒙主義の遺産がある。だが、トマス　ジェファソンからウィリアム　ジェームズに至る間は、もしそのひとを哲學者のうちに入れることができるとして、主だつた哲學者は一人だけだつたし、影響力のある運動としても一つだけであつた。すなわち、エマソンと超越論である。近來の四分の三世紀は、ロイス、ジェームズ、パース、デュイ、ホワイトヘッドおよびサンタヤナが優勢であつた時代であるが、これが最近出版されたこれら六人の有力な思想家の著作の選文集のなかで、アメリカ哲學の古典期とよばれることになつたのも大いにもつともなことである。これらの思想家の皆が、本人が歐洲人でないときでもほとんど專ら歐洲の諸哲學から影響を受けたのであつた。プラグマティズムはその諸考想を特別にアメリカ的な發想であると稱えてきたけれど、これまた、歐洲の傳統およびアリストテレース、スピノザ、ヘーゲルやダーウィンのような高名な先驅者たちの天賦の思想に大いに通じていた。現在でも、米國の哲學が歐洲の哲學者たちによつて大きく支配されているということは當つている。オクスフォードとケンブリヂと歐洲大陸とは米國の知的生活における公式な哲學學派と銘を打つことができそうな學派の大部分に對して感銘を供給し續けてきた。こうして、米國には實在論者、觀念論者、プラグマティストと並んで歐洲と同じように、實存主義者、論理－經驗主義者、スコラ學者、新正統派神學者もいることに誰しも氣付くことになる。

しかし、上記のすべての事柄にもかかわらず、アメリカ哲學は傳承物件にすぎないのではない。それは、アメリカ的性格そのもののように、實地經驗に屬する事柄である。なお、アメリカの歴史家コマヂャー（Commager）が言つた通り、「傳承が明白である程、經驗は一層感興深いものとなる」。もつと基本的な問題は、多分、アメリカ人がなしたことを何故取り上げたかということと、アメリカ人が取り上げたものを何にしたかということである。アメリカ哲學を諸學派へと見えすいた分類をすることは、今日の米國での哲學の役割を理解するということになれば承知しておかなければならないほかの同じく基本的な分裂のいくつかを晦ませる。哲學には地方別の違いもあれば、カレッヂの型の間の差異もある。哲學の本性と役割の理解には、學生がいだくもの、學校當局がもつもの、教授がもつものとでは大きな差異のあることも考慮しなければならない。他學科の教授、他の社會集團、職業著述家、大學外の個人は哲學を何にしているか、またそういうものが大學の職業人がするのとはどう違つているかに留意しなければならない。米國での書かれた哲

學という哲學は哲學の教授たちによつて書かれていると考えるのは誤りである。過去二、三十年に形式論理學の強調が多くの實例にわたつて大學（アカデミー）哲學の地域を狹めてきたので、大學哲學は古來の諸價値を新しい知識に照して解釋するものとしての歷史的役割を棄權してしまつた。文化變動の知的集面の役をするのに失格したが、その役が本來の哲學的職分なのである。論理學者はとかく歷史感覺を缺くことがあり、論理學者には文化における哲學の役割の理解が不十分である。論理學者は思辨的な假設への興味を缺いている。だから哲學的事業のこういう諸側面は近頃は思想史家、文化人類學者、歷史哲學者や政治、宗教、藝術の方面の著作家によつて取り上げられてきた。思辨的な數學者や物理學者を引き合いに出すに及ばないことであるが、かれらのうちでも米國史のこの時期で哲學者の役割に適格なひとがいくらもいよう。

二

こうした定性上の色合いを心にとめた上で、ともかくもわれわれはこの論文では大學社會と大學の哲學科とに話を限ることにする。わたくしは、讀者はいろいろの學派がもつているもつと技術的な問題と方針とに一般的に通じて居られることと考える。それらの一つ一つはそれを解明するには詳細で念入りな研究を要するものである。わたくしに割り當つたこの少い空間では、今日のアメリカ哲學での主要な提題と主流と見えるものを指摘し、それと共に讀者に哲學教育にあたつての地理的および學校別の相異についてのいくらかの考えを傳えるだけにしたい。おわりに、米國の大學教育課程にあるいくつもの科目の一つとしての哲學の役割について少しばかり論評を加えることにする。

アメリカ哲學の哲學史家であるマクス　フィシュ教授の言うには、アメリカ哲學はその近年の集面では第一審に〝デカルトの斷罪〟をとりあげてきた(1)。デカルトの直觀、理性主義、二元論は近代の米國の哲學の大概のものと不協和であつた。この狀況はどの時代の哲學も直接の過去の優勢な立場への反動として展開する事情を例解するのに有益である。プラトーンとアリストテレースはこの雛型の古典的な例である。しかし、對立の歷史的な潮位は論理的に可能な解答の埒で區劃されている。例えばデカルトの二元論をとりその諸可能性の海圖を描くならば、精神と物質の二つともが窮極的なものであるというのが眞であればわれわれは二元論を承認しなければならない。精神が虛僞であり物質が眞實ならば、唯物論を。精神が眞實であり物質が虛僞ならば、觀念論を。二つともに虛僞ならば中立主義――別なカテゴリーの說明――を承認しなければならない。アメリカ哲學がこれら四つの主題曲のどれかをとる變奏曲と考えられてよいのは、實さい、すべての哲學がそうでなければならないのと同然である。

(一)　さて、これらの主調をなすアメリカ哲學の主題曲が作曲された文脈を勘案すれば、最近の發展では最も影響力のある理論が有機的進化の理論(2)であることに疑いない。この理論が

説明の様式としてのアリストテレースの〃目的因〃を消去したことは、啓示倫理學と啓示神學、また經驗主義や自然主義の主導的な途に沿つて方向をとつた哲學的思辨を大學の哲學者たちは重視しないという結果を招いた。

進化が哲學へ及ぼした影響からは三つの特徴ある見地が出た。

a　變化の重視。われわれは例えば、デューイにおける主概念である〃成長〃の重視やホワイトヘッドにおける〃實體〃に代わる〃過程〃の重視を擧げてもよい。〃發展觀〃は哲學者ばかりでなく天體物理學者、地學者、文化人類學者、思想史家の作業概念になつた。變化と過程への關心はそれよりも大仕かけな社會變化そのものを反映した。手がかりはかつてのように法律や神學のなかにはなくて科學にあつた。永遠なものは遠ざけられ時間的なものが代つた。パルメニデースとプラトーンはヘーラクレイトスとアリストテレースに代るため見捨てられた。

b　意志の重視。前世紀のアメリカ哲學での最も顯著な變化の一つは理性主義から意志主義への變化である。聖アウグスティーヌス、ニーチェ、ショーペンハウエルから、またダーウィン、フロイトから、人間の動機は專ら意識的、または理性的、または論理的なのではないという當時高まつて行つた信念が由來した。

c　價値の重視。このことはすべて價値の傳統的構造を亂した。だから價値理論はひとびとの心をふさいだが、特に、事實命題とは區別された價値判斷の論理的構造を發見しようと欲したプラグマティスト達の考慮をふさいできた。こうした價値問題への配慮は今日の米國哲學の主導的な強調である。

(二)　自然主義と觀念論。疑いもなく自然主義は二十世紀の米國の世俗的なカレッヂにいる哲學者たちの主流の立場である。コロンビア大學のデューイやシカゴ大學のミードのようなすぐれた教師の弟子たちはその學說を國中に廣げた。デューイは批判的自然主義と唯物論の間に、また批判的自然主義と觀念論との間にも愼重な區別をしようと望んだ(3)。批判的自然主義者は唯物論者のように超自然をば斥けたが、觀念論者のように、精神、目標、價値、目的の本當の實在を承認した。批判的自然主義者の經驗主義は認識論では、認識されたもの、記述されたもの、說明されたものは五官の普通の過程のことばによるものでなければならないという見解が優勢を占める知的環境を意味した。〃知識の傍觀理論〃を排斥する――知識は行いである。傳統的な經驗主義は觀念を生みだした經驗にまで觀念を遡及させた。新しい經驗主義は觀念を檢證する經驗へと推進した。そこから、また、二十世紀プラグマティズムの理性論および觀念論への反動がある。ジョサイア　ロイスのような、觀念論の上げ潮の水位を記しそして、モリス　コーンによればアメリカ哲學の中で克服されることなく存續された形而上學を代表するひとできえ、その反動を乘り切ることができなかつた。南カリフォルニア大學のフルウェリンゲやボストン大學のブライトマンのような人格主義者や、コーネル大學 (Sage School of Philosophy) の觀念論者またはハーヴァド大學のホッキングやイェール大學のブランシャードのような觀念論者たちはアメリカ哲學

に影響を及ぼし續けたが、かれらの立場はもはや主流でない。しかし見落してならないことがある。手短かに記すことにするが、プラグマティズムが觀念論の群をはなれたことは決してないこと、例えばその探究論理學は本質的にヘーゲル流であり、近年の觀念論とプラグマティズムに共通な協同社會の理論への優勢な興味は、觀念論的思想に共有な感銘の側からアメリカ社會學と社會哲學へ影響を及ぼしてきた。滿足な道德理論への關心は、同樣に、觀念論への興味の再起の故であり、これは最近のC・I・ルイスの論文『正と善』に見られるカントの影響に認めることができる通りである。

㈢　だが、プラグマティズムないし自然主義が觀念論への反動とするならば、實在論はプラグマティズムへの反動である。モンターギュやサンタヤナのような哲學者たちによつて代表される新實在論および批判的實在論は認識論を哲學の中心問題として哲學へおし戻そうと欲したし、またかれらは常識がもつている普通の存在主張をする實在論、つまり特殊存在論的實在論とプラトーン流の存立（持續）＝實在論との兩方を强調した。新實在論者は知るものと知られるものとの間に直接の關係があると信じ、その關係がロックの問題を消去したのに對して、批判的實在論者はロックおよびデカルトの兩者の認識論的二元論へ立ち歸えつたと思われた(4)。大概の場合、實在論的認識論は唯物論的存在論に抑壓的でなかつた。もちろん新－スコラ學のもつている變樣された實在論は目立つた例外をなすものであるが。

㈣　論理－經驗主義はデヴィド　ヒュームの影響を代表するものであり、多分ヒュームは英國および米國の現代哲學者の思考を他のどの近世哲學者よりも支配してきた。觀念相互の關係と事實の知識との間にかれがなした區別はデュイによつて廢棄され、ラッセルによつて維持されたものであるが、その區別、哲學を分析的な道具とする考え、特にその含意が後日引き出されたところによれば科學の諸概念の解明のための道具とする考え、は近世の哲學上の最も有力な諸概念のうちに入つてきた。そこから結果した實證主義とまた形式－または、記號－論理學への興味への支持として、デュイの探究理論がパースによつて單に〃思考の自然史〃にすぎないものとして排斥されたことを記してもよい。ブロドベックは〃一つの新理性論〃であり、ひつくるめてみて餘りにもヘーゲル風のものと思つた。デュイの探究連續體は客觀主義觀念論における心と自然と他者の心との連續體へ驚くほどの相似をもつていると見える。デュイにあつて心が自然化されたとすれば自然は精神化されたようであつた。わたくしの自分の感じでは、デュイはかれの天才にもかかわらず、自然、ことに人間性と經驗を道德、藝術、宗教における理想的價値と綜合することにかけて十分に成功したことはなかつた、と思う。かれがそれを行つた限りではわれわれは『自然と經驗』で解說されたかれの基本的諸概念の完成として『經驗としての藝術』におけるかれの結論を見るべきである。

アメリカの哲學者たちが今日綜合の新しい企てを手がけることに熱心なことは論理－經驗主義への現在の反動によつて例證される。エヤーが『言語、眞理、論理』で走つた極端と、數學

と物理學の言語を吟味した場合を除いて傳統的な意味での哲學の徹底的な排斥―ライヘンバッハの立場―とは、大學哲學者たちの氣性に合うものでなかつた。大學の哲學者たちは我知らず觀念論者たちの思辨的な興味と諸價値の檢證への關心をなお保持していたことは現在では明らかであろう。反動は二通りである。第一に、もつと氣に合つた實證主義を、特に〝言語哲學〟運動の形で、展開する企て。第二に、自我と人間の運命との本性への關心の復活に感銘を受けた新舊双方の宗教的正統による實證主義の全くの排斥であり、これは特に實存主義に反映された通りである。

(五) 言語哲學は最廣義では言語上の相異が知識に差異を生ずるかという問いを提出する(5)。ついでながら、これは日本人にも問題である。それは日本語は明かに具體的、質的な印象を特に直覺的あるいは美的な與件について表現できる言語でありながら、抽象的な概括または概念化がとりわけ量的變異にわたるときに不十分であり、しかもそうしたことが科學的思考の要求するものだからである。どの特定の言語でも許すような種類の思考を統制する文法的および論理的規則は今世紀の英國および米國哲學者の多くのひとにとつて唯一とは言えないがすべての興味になつてきた。〝論理的分析〟としてはその最初の大きな感銘をG・E・モーアの一九〇三年の有名な論文〝觀念論の論駁〟の痛烈な論理的分析からひきだしたのである。それは更にホワイトヘッドとラッセルの『數學原理』(一九一〇―三)によつて進められた。この書物のなかでアリストテレースの傳統的主語-述語論理學は新しい擴張された關係論理學に含みこまれたが、このものは先立つ形而上學諸體系の破壞的批判に使われたものであつた。その結局の結果は〝認識的意味〟を〝直接に觀察される特殊〟へ還元すること、平たい言葉では、いかなる言明もそれが感官知覺によつて檢證されない限りは有意味でないと主張することであつた。これはひろくノイラート、カルナップ、シュリック、エヤーなどの立場となる結果となつた。これらの〝論理-實證主義〟と呼びならわされたひとびとは、次ぎにすべての倫理的、美的および形而上學的言明、つまり普通は〝感情的〟と標示される言明を認識的言明から消去することへ進んだ。この立場はチャールズ スティヴンソンの著書『倫理學と言語』(一九四四)によつて例證されている。

この問題にかけては、デュイの道具主義とチャールズ モリスがかれの書物の『記號、言語および行動』(一九四六)のなかで意味の〝用語論的〟(プラグマティック)、〝構文法的〟および〝意味論的〟次元をもつておし進めた〝意味科學〟とは實證主義への溫和な反動と見られることができるし、また表現のもつ認識的以外の機能にも、だからまた價値の領域に眞理を見付けるという機能にもこころよく關心したものと見なされることができる。エルンスト カッシラーとその弟子シュザンヌ ランガーもまた、言語分析の立場からの代策とカントの範疇論の擴張、つまり人間精神がもつ神話的、宗教的および藝術的表現を科學的表現と並んでそれに地位を見出すこと、を例證している。

オクスフォドの言語哲學運動は最近日本で詳細にそのアメリ

カにおける指導的代表者の一人によつて論ぜられた。そのひとはオハイオ州ケニヨン大學のヴァージル　オルドリッチ教授で、かれは一九五五年の後半六ケ月間京都アメリカ研究セミナーの部長の職を執つた。野田教授はオルドリッチ教授が一九五五年十一月に京都哲學會でした講演を飜譯しているが、わたくしは讀者がそれを讀むことを期望します。この講演で言うのには〝哲學は新しい言語哲學の哲學者たちによつて言語の用を解き明かすものと考えられるばかりでなくて、言語そのものが多くの種類の活動あるいは〝行い〟の一團として描き出されている。言語を、言語體系の外にある存在またはものに對應する語（要素）からなる靜態的體系と想像する代りに、言語は〝特徴的に人間の活動が可能になつている媒體〟と考想されている。〝經驗は科學の言語より廣いから、われわれがこの言語だけを使うように事理の當然で强制されているのでない。こうして形而上學さえもが再び可能になつてこよう。

(六)　形而上學は實際に可能であることは、われわれが一つの〝哲學の學派〟の輪郭を示している一つとして述べようとする米國哲學の形勢の最終に述べるもののうちに例證されている。これは實存主義、實證主義また實際どの科學的合理主義に對しても極端な反動、である。ここでは醫學上の徴候である〝嘔き氣〟が、はじめて、實在的なものの非合理性を賞揚する存在論的範疇の品格に上つた！　サルトルによつて代表される型の實存主義がアメリカで廣い追隨者たちを得ているとはわたくしは考えないが、他方實存主義でも特にキェルケゴールのような著者たちのものは多數の優れた哲學的神學者たち、目立つて新正統派プロテスタントたちに影響を及ぼしてきた。ラインホード　ニーバーやパウル　テイリッヒは有力な追隨者たちをプロテスタントの宗派學校のなかにもつている。今まで何十年かを自由主義的でほとんど自然主義的な神學に馴れてきた多くのプロテスタント各派大會にどんな衝撃をこれらの新しい訓練を受けた若い〝正統派〟說教者たちが與えることになるかと思つてみる程である。新正統派神學は一方でアメリカの生活のうちの現在の一般的な保守的傾向を反映しているが、それは間もなく、一世紀前にアメリカ人にダーウィン學說が導入されて以來のどれよりも大きな神學上の論爭を生むかもしれない。面白いことに、戰後に軍隊に勤務中歐洲で學んだG・I・たちは實存主義に出會つて、米國のカレッヂにおける實存主義の勉學の需要を生みだすのに力があつた。今は掌の大きさよりも大きくはない影であるが今よりももつと影響をもつようなこともあるかもしれない。筆者の意見では宗教的實存主義は、人間の墮落の教說と人間をとるに足らないとする教說を承諾することにかけて、アメリカ人は神の絕對と主權を認めるのには悟りが早かつたにもかかわらず、歷代のアメリカ人の拒否とは背馳すると考えるのではあるが。しかしながら、その有神論的な形にでもあれ、無神論的な形にでもあれ、實存主義は腹の底では同じ心理、彼岸―それが〝神〟とよばれるにもせよ〝無〟とよばれるにせよ―と生きている人間を彼岸から隔離する溝とへの壓倒的な配慮によつて動機づけられていると思えることでもあろう。ルクレーティウスのように實存主義者たちは死という事實への

壓倒的な配慮を見出すが、またかれのように自由と責任の倫理學への礎石となる熱意を缺いている。

(七) 哲學と宗教とを語るに當つては、米國近世史の主流をなす展開の一つとなつてきたもの、ローマ公教（カトリック）の尨大な成長を見落してはならない。だから、われわれの大學やカレッヂでの一つの主流の影響力としての新－スコラ學を見落してはならない。マリテンとジルソンの、特にジェズイット派カレッヂでの、普及は註記に價いする。また哲學の勉强がカトリック派のカレッヂで人文科の學生たちには他の學生たちに比べてかなり多く要請されていることは米國の高等教育案では意味深い。

(八) 文化と歴史の哲學への高まつてゆく興味もまた關說されるべきである。ディルタイ、シュペングラー、ソローキンやトインビーのような著者たちの目立つた、また高まつてゆく影響は、クロォチェのような著者たちが發見した考え方、すなわち哲學は結局のところは本當は歴史の一種であるとする考え方、を見過さないようにわれわれにせまる。もう一つ、學部課程の教科目では實際にそうなつているが、米國の哲學科で、わたくしの考えるところでは非常に意味のある新しい發展は、東洋學への多大の新しい興味である。西洋的なものと東洋的なものとの間の接近には非常に如實な關心がある。ノースロップの『東洋と西洋の會合』のような研究が普及してきた。かれらの分析は批判されるべき多くを殘しまた全くの誤つた解釋によつて數えきれぬわざわいをなしているが、それでもまだ、情報に對する驚くほどの讀者の需用をまきおこしたし、東洋についてのあらゆる種類の講義題目が着實に增加している。

三

米國における學問的な仕事の一部としての哲學について一言するのにわずかばかりの餘地がある。哲學がアメリカのカレッヂや大學で十九世紀の最後四半期に、大部分はドイツの影響によつて、別個の學科になつたときに、哲學が大學の教科課程で綜合し統一する要因として西歐の教育で演じてきた役割を失つた。それとともに哲學は文化そのものにおける廣汎に及ぶ影響を失つた。前期の神學上、政治學上の思想や社會思想が哲學上の思索や書物を前提としてきたところへ、專門化した哲學が、學校當事者、教師、學生によつてひとしく、カレッヂの撰擇講義題目の平等主義の堆積のなかでの一寸別な專門と見なされる結果になつた。心理學が發達して別個の學科になつたのに伴つて哲學は剪定されて、多數の機關から消え去つたのが落ちであつた。哲學にとつて殘つたものは形而上學の一般的諸問題、すなわち存在論、宇宙論および認識論の問題からなる漠然とした混合であつた。それらの問題が言語および科學的方法の分析の問題へと發展するとともに、哲學は正當な職務をもう一度見つけたようにみえたが、ごく少數の興味をもつた專門家以外には扉を閉ざすほどに狹い職分なのである。この點では米國の大學社會での哲學は日本におけるその相當物よりももつと制限されている。日本のは形而上學的、大部分はドイツ觀念論的の、趣

味が低徊しており、われわれが米國で哲學プロパーと見なすに至つたものと並んで教育學、社會學、心理學、教養科用を含むようないまだに通有な區分をもつている。

第二次世界戰爭前の哲學の職の多くは一般的教育に對する專門教育の强調という職業教育の强調の增大の結果であつた。三十年代の不況に左右されたための實際的訓練への要望、大規模な州立大學の擡頭、新しい所得稅制度は聯合して多數の小さな獨立および宗派別の人文科のカレッヂを滅亡の線においやつた。この時期には哲學科は何か貧澤なものに思え、教授定員一名に切下げられることが往々あつた。終戰以來歸還兵奬學金と一般的な人口增加がこれらの小規模の機關をまたそうして哲學者というものを救つた。また過去十年間に、人文科教科目の再評價もほとんどどのカレッヂにも起つた。教科目再編成と擴充の要望が、エリオット總長の名句〝キャフテリヤ風〟（セルフサーヴィス式の撰擇）教育の學生による講義題目の自由撰擇に對する反動として起り、また一般科目教育が新しい地位をもつたことは學部課程の教育案での哲學の役割の再評價をひきおこした。戰爭の衝擊と、近代生活に對する科學と宗教兩方のもつ含意への高まる興味とは、學生と學校當局へ大學哲學への興味を復活させた。

米國での最大の哲學科は少數の大きな東部の大學と州立の大學とに見出される。このことは、特に例えばオハイオ州立大學のように文學士（B・A）での卒業には哲學の講義題目をとることが要求されているような場合に當てはまる。一般に東部のカレッヂと中西部の大きな大學は提供科目では多樣であるが、普通はある特定の〝學派〟に支配されている。こういう具合に、コロンビヤ大學はデュイになお强く影響されている。この機關だけで訓練を受けた多數の哲學教師たちはデュイの影響を廣める有力な因子の一つであつたし、なおその因子は强い。それはコロラドやユタのような山岳部の州では主導的なようであるし、またほとんどいずれもの師範カレッヂの特徵であり、また哲學の教授がコロンビア大學で訓練を受けたことのわかるような場所ではどこでも統卒的學說として働いている。しかしながら、その直接の弟子たちは急速に消失しつつあり、いまは〝改革論者〟たちが明かに先頭に出ている。形式論理學は、ミネソタ、ヴィスコンシン、ミシガンやアイオワなどの中西部の州で强い。それが東部のカレッヂを支配していることはアメリカ哲學會東部部會のプログラムを讀めば知ることができる。しかし、極端な實證主義からの推移のしるしは明かであり、オクスフォドの言語哲學が主な關心になつてきている。觀念論は、ブランド　ブランシャードが主任をしているイェール大學やボードン　パーカー　バウンやエドガー　シェフィールド　ブライトマンの影響が未だに優勢なボストン大學のような所では、まだ强い。バウンはメソヂスト派に哲學的言語を與えたひとであり、メソヂストの人文科カレッヂでは哲學者が觀念論者であることは普通である。こういう線では、ハーヴァド大學のホッキングも影響力がある。實存主義はその影響の點では散在的であるが、ハーヴァド大學のような東部の學校や實證主義の要塞、ミネソタ大學、でさえもその代表者たちを見つけることができる。西海岸ではカリフォルニア大學でのように各種の影響

がある。南カリフォルニア大學では人格主義やラルフ　タイラー　フルウェリングが未だに影響を及ぼしている。しかし大學院のあるところを除いてはどの〝學派〟の基調というようなものもほとんど影響をもつていない。このことは特に、州立の機關のように、學生が學位資格に哲學の講義題目を一つか二つしかとらないところには當つている。しかし面白いことに、こうしたまだ表面的な狀況ででも、親たちは、〝非宗派の〟哲學は〝世俗〟哲學、すなわち唯物論的哲學を意味するという危惧を表明し、哲學の勉强が宗教に關して及ぼす家庭教育への影響についての關心を口にする。

現在、學部課程での普通の哲學教育案は四つの基本的講義題目、哲學の諸問題、論理學、倫理學、西洋哲學史からなつている。これらの大抵は半學年學期のものまたはそれ準ずるもので〝三單位〟になる。こゝ十年間にカレッヂが卒業にこれらの題目のうちの一つを要求することが極めて一般になつてきた。人文科カレッヂでは哲學科が他の學科への〝奉仕學科〟として活動することも普通になつてきた。そこで、〝……の哲學〟、教育哲學、政治哲學、宗教哲學、科學哲學、とか藝術哲學のような、講義題目が見當ることが多くなろう。時には、教育哲學と政治哲學との場合には特に、これらは哲學科ではなくて教育學部とか政治學科とかで教えられることになろう。多くの機關における哲學の教授たちの興味が形式論理學とか意味論とか科學哲學へ狹まつた結果が、〝……の哲學〟というような各種の傳統的な型の哲學の講義題目が他のいくつもの學科に出現することになつた。またしばしば、そうしたものが僞裝して、あらわれる。例えば初等論理學が國語學科（スピーチ）〝で論爭の要點〟(Essentials of Debate) として開講されるという風なことがある。そこから起つた〝權限論爭〟はここ二、三年の間に、これらの講義題目は哲學科へとり歸えされるべしという要求をひき起した。他の極端では、ケニヨン　カレッヂのチャーマー學長は、哲學科は論理學の教授よりも少ししか出ず、すべての教授たちはほかのなにが專攻であるかに關りなく哲學を特定的に修めること、また、すべての授業が〝哲學的〟であることを提案した。問題は教育學部が今日教育哲學に關心していることに例證されている。その題目を擔當して教えているひとの幾人もが訓練を經ない哲學者である。他方、修練した哲學者はもつと技術的な哲學的分析に興味をもち、教育學部のあからさまに淺薄な水準を輕蔑して自分らを活用させることを拒否してきた。

全般的には哲學での教職の數は增加している。實際の數は、例えば英語の教師や心理學の教師に較べて、少ない。アメリカ哲學會は東部、西部、および太平洋部會から拘束的でない仕方で組織された連合體であるが、會員名簿にのつている會員は一五〇〇人を超えない。

哲學の教育はセミナーの型をとるものが多くなつている。大きな教室、特に學部課程の學生の必修科目では講義の方法がまだ一般ではあるが。哲學で講義の方法をとるのは問答からなる〝ソークラテース流の方法〟や自由討議よりもはるかに劣つた、單に受動的なだけの教育法と見なされている。哲學教師の目標は一般的に言つて學生との自由だがしかし批判的な討論に入ることである。學生の見解の獨自性は徹底して奬勵されてい

て教材の暗記は―世界の幾多の場所、それに日本を加えてもいいかと思うが、そういう所での哲學や宗教の教育とは違つて―耳にすることがない。研究方針は一般に、パースの標示によれば〝養成所哲學〟に代る〝研究所哲學〟の方針であり、パースは『センチュリー辭典』へ〝大學〟の定義を求められたときにこの標示をしたものである。パースが言うには、研究所、從つて、大學、は研究のための場所であり、養成所は〝教化〟のための場所である。學習は協同的で自由な探究であり、結局のところ學生は自習するのである。學生は自己が發展する全く自由な環境を與えられなければならない。

最後に一つだけ〝大作〟(Great Books) 運動家たちについて註譯を加えよう。これはモーティマー　アドラーやシカゴ大學のハッチンズ總長の著作から感銘を受けたもので、現在フォード財團の支持を得ている。米國中の多數の圖書館では成人たちが毎月二回集つて、前以て贊成を得てあつた哲學上の古典を論議する。〝大作運動〟がうつている〝基礎科目主義〟(essentialism) とか〝不易主義〟(perennialism) やまたは〝新トマス派思想〟すらへの、明かな關連に關する哲學上および教育上の論爭にまきこまれることは公立圖書館は避けてきた。館員たちはかれらの企画を獨自的に遂行していて、成人教育のこの實驗は、アメリカの諸社會集團のなかで、あらゆる生き方のひとびとの間に多數の異つた型の哲學への多大の新しい興味と影響をもたらした。

(了)　(譯　武田弘道)

***附記**　これはもと一九五六年に廣島大學で行われた講演で

ある。昨年に至る二年間ハリス教授はオハイオ州クリーヴランド市、ウェスタンリザーヴ大學哲學科の主任の職の賜暇をとつて、京都大學教育學部でフルブライト招聘教授として教育哲學の教授であつた。昨年七月に、東京都上目黒の日本駐在アメリカン・スクールの校長となつた。

〔註〕1、Max Fisch, Editor. *Classical American Philosophy.*

2、西部におけるこれとまたそれ以外の近年の思想傾向は概論的な論文〝現在の哲學とその過去の近年〟に啓發的な論述がある。"Contemporary Philosophy and its Recent Past," in *Contemporary Philosophy*, edited by James L. Jarrett and Sterling M. McMurrin, Henry Holt and Co., N. Y., 1954.

3、批判的自然主義の明解で簡明な說明が次の教科書にある。*Philosophy: An Introduction*, by Justus Buchler and J. H. Randall, Barnes and Noble, 1937.

4、參照、"The Story of American Realism" by W. P. Montague, *The Ways of Things*, Prentice Hall, 1940. がだ、A. O. Lovejoy, *The Revolt against Dualism*, Open Court Publishing Co., 1930.

5、參照、二卷からなる論文集　*Logic and Language*, edited by A. G. N. Flew, B. Blackwell, Oxford, 1951, and 1953.

(譯者　大阪市立大學文學部〔哲學〕助教授)